慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶應義塾大学人文ＣＯＥ主催 : 労働倫理シンポジウム
Sub Title	Symposium on "work ethics"
Author	渡辺, 茂(Watanabe, Shigeru)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2003
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.57 (2003.) ,p.1- 2
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	労働倫理シンポジウム
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069957X-00000057-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学人文COE主催
労働倫理シンポジウム

企画・司会　渡　辺　　茂*

Symposium on "Work ethics"

Shigeru WATANABE**

倫理的な判断はいつ現れたのだろうか？　倫理にはもちろん規範科学としての意味もあるが，同時に経験科学としての側面もある。実際にどのようなものが倫理的判断として受け入れられており，それはどの程度文化依存性があるのだろうか？　これらの研究は倫理の経験科学的研究であろう。倫理には発達心理学的な視点も重要である。いくつかの倫理的判断は生まれつきのものではなく，学習しなくてはならないものだからである。もちろん，倫理的に正しくない，反社会的行動のあるものは神経系の障害で生ずるし，遺伝素因を疑わせる事例もある。現代の人間のさまざまな行動の起源をヒトが出現してからの自然選択の結果としてとらえるのが進化心理学の発想であるが，比較認知科学ではさらにさまざまな動物の進化との比較から人間の特性をとらえようとする。

慶應義塾大学人文COE「心の理解にむけての統合的方法論の構築」主催のこのシンポジウムはヒトに種固有の行動とも思われる倫理を動物実験から考えるZentall博士の大胆な研究を中心にしたものである。この講演に対して，文化人類学の立場から（宮坂），倫理学の立場から（樽井），行動分析の立場から（坂上），それぞれの研究成果あるいはコメントを述べたものの記録が本稿である。

Zentall博士の研究は倫理の中でも労働倫理(work ethics)を扱ったものである。単純化していえば，Zentall博士の考える労働倫理はある種の勤労思想であって，動物がより高い労働の結果としての報酬を低い労働の結果としての報酬より選好する，というものである。労働倫理には多くの側面があると考えられるが，その起源にはキリスト教，とりわけプロテスタントの思想が関与していると思われる。そこでは労働の対価は天上での貯金であり，現世の賃金のようなものではない。しかし，天上の貯金と現世の利得は正の相関を持つべきであると考えられる。もちろん，詐欺や強盗で現世の利得を得たものが天上での貯金を持つとは考えられないが，本来の姿としては労働は現世でも天上でも，その程度に応じた対価を持つべきものであろう。この発想は価値は需要と供給のバランスによって決定されるという考え方とは異なり，いわば勤労それ自体に価値を見いだすものである。このような宗教に深く根ざしたものが動物の行動でみられるだろうか？　実は，このような事例は実は過去にも報告されている。1960年代に抗負荷選択(contrafreeloading)という現象が研究されたことがある。これはオペラント箱といわれる実験装置を用いた研究で，この箱の中にはハトがつつくことができる窓とそれによって作動する自動給餌器がある。通常の実験では，空腹にしたハトに餌を報酬としてこの窓をつつくことを学習させる訳であるが，抗負荷選択の実験では箱の中に給餌器とは別にいつでも食べることができる餌箱が設置されている。ハトは別に窓をつつくという労働をしなくても只の餌を得ることができるわけである。実

* 慶應義塾大学文学部教授（心理学）
** Professor of Psychology, Department of Psychology, Keio University.

際にこのような実験をするとハトは只の餌があるにも拘わらず，窓をつついて報酬を得るという行動をしめす。この現象は一般理論として有機体が労働の結果としての報酬を労働なしに与えられるものより好む，ことだと解釈された。

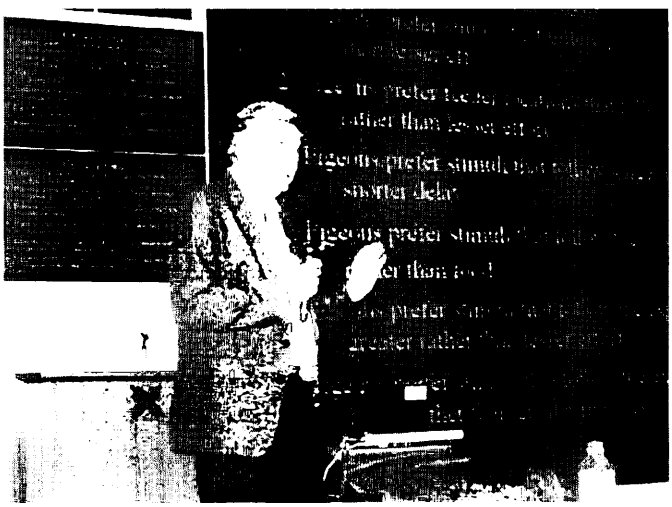
筆者はかつてこの現象の実験を行い，抗負荷選択はそのようなある種のピューリタン的な解釈よりも，採餌行動の戦略として理解すべきであることを主張した（渡辺，1998)。餌場をひとつに限定することは採餌の短期的最適化としては適応的だが，餌場の枯渇可能性のような長期的な適応を考えると，短期的には不利であっても餌場を複数確保しておくことが結局は適応的になるというのがその論文の趣旨である。

Zentall 博士の研究は抗負荷選択ではないが，動物が高い労働の対価としての報酬を好むことを示している。これに類似したものとしては刻印づけの「努力の法則 (law of effort)」を揚げることができる。刻印づけはニワトリ，アヒルなどの雛が孵化後一定時間（通常は 24 時間以内）に見せられた対象に対して愛着を形成し，その対象に追従することをさす。この時に追従するのに努力を要するもの程強く刻印づけされるというのが努力の法則である。一般的にいえば臥薪嘗胆苦労して手に入れたものの方が棚からぼた餅式に手に入れたものより愛着が強いといった現象であろう。しかし，同じ報酬を得るのに 1 時間働かなくてはならないのと 20 分ですむのなら，後者を選ぶ方が適応的だともいえる。Zentall 博士の実験では特定の条件下では動物もまた，高い労働の対価としての報酬を選好することを示したものである。このことは，ある種の労働倫理は動物にもヒトにも備わっているものであり，宗教的な意味付けはむしろ，そのような行動傾向の再解釈である可能性を示唆する。しかし，Zentall 博士の労働倫理は特別な状況下でしか見ることのできない現象であり，実験状況のもたらす人工産物である可能性もある。今後，どのような変数がヒト類似の労働倫理を動物において発現させるか，という詳細な研究が必要になろう。

（本稿作成にあたり商学部の梅津光弘氏との議論が参考になった。記して謝意を表します）

引用文献

渡辺　茂　1987　オペラント箱内の採餌行動　植物防疫，41, 583-587.



Zentall 博士